

# 手術せずに腰痛を治すAKA療法を推進

●「先生じゃ治らない」の一言で新治療法を模索



望クリニック  
整形外科

住田 憲是 主任医師

## 整形外科的痛みの90%は関節機能異常で起ころる

腰痛は人間が二本の足で歩き始めた、いわゆる進化が生み出したものだから……、と言う医者は多い。が、それは腰痛は“治らない”と言っているのと、ほぼ同じである。

治らないなら、そのままにしておけばいいのに、整形外科では手術をして、時には逆に悪くなってしまっているケースも多い。

そんな状況があるから、患者は東に腰痛の名医がいると聞くと東へ、西に名医がいると

## 聞くと西へ。

その東奔西走に終止符を打つ療法が、着実に注目を集めてきている。従来の整形外科の理論とは大きく異なる「AKA（関節運動学的アプローチ）療法」。日本的にいえば「関節運動学的アプローチによる腰痛治療法」ということになるだろう。

アメリカのM・A・マッコーネル博士が一九七〇年代に唱えた関節運動学を基礎にして、日本のリハビリテーション専門医の博田節夫院長（博田理学診療科・大阪府河内長野市）が開発した手技療法である。

東京でAKA療法を推進しているのが望クリニック（東京・豊島区）整形外科の住田憲是主任医師。大学病院で「手術以外に方法はない」といわれた腰痛患者が、数多く救われている。

CT、MRIと検査技術は進み、骨や椎間板の異常が、これまでの何倍も確実に発見できるようになった。

痛みがひどいケースでは、MRIに写った椎間板の異常個所が、当然、痛みの発生場所と考えられ、結局、手術となる。

しかし、椎間板ヘルニアで手術を勧められたケースで、本当に手術が必要なケースはわずか10%前後に過ぎないのです。残りの人々は、手術をしても痛みが取り切れず、その後

に治しにくくなってしまします」と、住田主任医師は言う。

住田主任医師は厚生省に『AKAによる腰椎椎間板ヘルニアと診断された症例の診断と治療に関する研究』と題した報告書を、提出している。

それによると、MRI等を用い腰椎椎間板ヘルニアと診断された患者四六人をAKAを用いて診断・治療を行ったところ、四六人中、本当に神経が傷害されて手術が必要な人は、わずか三人に過ぎなかつた。残り四三人は、仙腸関節機能異常が一六人、仙腸関節炎が二四人、仙腸関節炎に反射性交感神経性ジストロフィーを合併した人が三人だつた。

患者の93・5%が手術不要だつたのだから、なんとも驚きである。

人体には二〇〇個を超える関節があり、それらは関節内で、滑り、回転、回旋という三つの運動が組み合わされたさまざまな動きに対応している。

だが、何かの原因で三つの運動がうまくいかなくなることがある。それが関節機能異常である。

「整形外科的な痛みの多くの原因が関節機能異常か、それをもとにした関節炎です。約90%といつても過言ではありません。そして、最も多くの部位の痛みと関係するのが仙腸関

節です」

お尻の仙骨から蝶の羽のよう<sup>ちよう</sup>に広がつた腸骨とを結びつけているのが仙腸関節である。中腰などの姿勢をとつたりすると、関節機能異常が起きてしまう。腰痛といつたその部分のみの痛みではなく、遠く離れた部位にまで痛みは発生する。

「肩にも、老化の見られる膝にも痛みが走ります」

こういった場合、2～3ミリの“遊び”のある仙腸関節を正常に動くよう<sup>よう</sup>にするのがAKA療法である。手技療法なので、その技術に大きな差が生じる。それだけに、技術を修得した整形外科医が増えないことは患者は減少しない。

今、住田主任医師が中心となつて、AKA療法を行う医師を育成している。

患者の一言が“痛みの治療革命”的起爆剤となつた

この療法に出合うまでは、とにかく悩みの連続だつた。

住田主任医師は昭和二一年、愛知県に生まれた。家業が薬局とあって、岐阜薬科大学に進み薬剤師に。

「痛みに興味を持つていましたが、薬で痛みを取るのには限界があると感じ、医師になろうと思つたのです」

昭和五〇年、東邦大学医学部を卒業し、整形外科医局に入局。東邦大学大森病院 同大  
大橋病院、大和市立病院を経て、昭和五七年、整形外科医院を開業。

「医局員時代には、入院患者さんをどのように治療していくかを話すカンファレンスを行います。自分が受け持っている患者さんのケースを出して、先輩方に相談に乗ってもらうんです。そこへ、先輩の一人が激烈な痛みを訴える腰痛症の患者さんのケースを出したんです。神経学的検査でもレントゲンでも全く異常がないのに、痛みはすごい。それで困って出したんですが、先輩諸氏から、何のアドバイスも得られないどころか、検査に異常のない者をなぜ出したのかと、かえつて叱られてしまった。そのとき、レントゲンや神経学的検査に変化のない痛みはアドバイスできない。これが現実なんだなあ、と思つたんです。それが引き金になつて開業したんです」

整形外科の領域は広い、そして、治療に時間がかかる。住田主任医師も骨折から慢性関節リウマチまで、さまざまな患者さんを診た。が、時間がかかるというのは、それだけ患者さんの症状を治せないとということでもある。

そんな開業したての、ある小春日和の日。

小林トキさん（仮名、六五歳）が膝の痛みを訴えて、住田主任医師を訪ねてきた。膝が痛い以外は、本当に元気で口も達者。住田主任医師は「変形性膝関節症」と診断。変形性

膝関節症は「膝関節の軟骨がすり減り、骨同士がすれ合うために痛みが出る病気」である。レントゲンにはつきりとそれが写っていた。

手術で膝関節を金属製の人工関節に換える方法もあるが、それは最後の手段。それまでには、痛み止め薬を使つたり、膝関節を電気で温めたり、患部にステロイド剤を打つて炎症を抑えたりした。

「二～三日はよくなりますが、すぐに元に戻つてしまします」

それでも、小林さんは一年間、住田主任医師のもとに通つたが、結局、「もういいですよ」という前に、小林さんは通院しなくなつてしまつた。

それから数カ月後、診療を終えて、夜、帰宅しようと道を歩いていると、住田主任医師は、小林さんとバッタリ出会つた。足の引きずりが大分取れているようだ。「おばあちゃん。膝、大分よくなつたみたいだね」と住田主任医師は声をかけた。

「あつ、先生。整体とかいうのを受けてるんですよ。大分いいよ。先生のところじやよく

なんなかつたけどね。ハハハ……」

相変わらず口の達者な小林さんだ。

「しかし、あの一言にはショックを受けました。いつもそれで悩んでいましたが、面と向

以来、何とかいい治療法は……と、悩み続け、昭和六一年、AKA療法と出会い、博田節夫院長の指導を受け、AKA療法実践者の一人として歩み始めた。  
「まさに痛みの治療革命です。それに出会えたのも、正直に治らないと言つてくれた患者さんのおかげと思っています」

## たつた二回のAKA療法で積年の腰痛が治つた不思議

平成七年三月。腰痛を訴える遠井啓さん（仮名、三八歳）が望クリニックの門をくぐつた。

住田主任医師は、遠井さんが持参したレントゲン写真を見て驚いた。腰の骨がボルトで固定されているのである。

「大手術をしましたね。どこで？」

住田主任医師が聞くと、遠井さんは、中部地方の有名な病院名をあげた。そして、続けた。

「腰椎の第4と第5の間にヘルニアが出ているので、手術することになつたんです。加えて、椎間板も弱くなっているのでボルトで固定しないと、腰痛は治らないといわれまし

た」

「しかし、腰痛は治らなかつた」

「はい、そうです」

「しかし、腰痛は治らなかつた」

「あれだけの大手術を受けて、腰痛が治らないどころか、逆に前よりひどくなつたのでは、誰だつてノイローゼにもなりますよ」

住田主任医師は、遠井さんを問診していく、仙腸関節の機能異常だと確信した。

それは、従来の整形外科で「腰椎椎間板ヘルニア」と診断された患者の約93・5%は、仙腸関節機能異常、仙腸関節炎、仙腸関節炎に反射性交感神経性ジストロフィーを合併したケースというデータが出ていたからである。

「まず、仙腸関節機能異常です。大丈夫です。二～三回治療を続ければ、良くなります」  
よみがえってきた。

住田主任医師にうながされ、遠井さんは治療用の寝台に横たわった。

「痛いときは、『痛い』と言つてくださいよ」  
と言つた後、住田主任医師はAKA療法を始めた。

AKA療法は手技療法で、何らかの原因で機能異常を起こしている仙腸関節を動かし、機能異常を取り除こうというものである。

住田医師は、遠井さんを横向きにし、後ろに立って、右手をお尻の仙椎に当てて、仙腸関節を動かそうと、多少力を入れる。

仙腸関節には、わずか2~3ミリの遊びがある。その遊びの範囲で動かそうとするのは、非常に熟練した高等手技技術が必要となる。

一五分くらいのAKA療法が終わると、

「先生、腰の具合が大分いいようです。痛みはまだありますか……」

遠井さんは大分元気になっていた。

「明日くらいには、多少、今日より痛みが出るかもしれません。痛みが出ているときは、無理な運動は絶対にしないでください」

「腰痛体操はいいんでしよう?」

と、遠井さんが聞くと、住田主任医師はきっぱりと言った。

「やらないでください。腰痛体操で腰痛が治るのなら、遠井さんは苦労はされなかつたはずでしょ?」

「はい。そうです」

遠井さんは、このAKA療法を二回受けた時点で、腰痛はほぼ完治した。

「劇的に治ったと言つていいでしょ。ノイローゼもなくなりましたし、ボルトも取りはずしても全く問題はないはずです」

痛みと“グッバイ”できなかつた患者が、望クリニックに押し寄せ、あきらめていた腰痛とグッバイしているのである。

「MRIで異常が見つかつても、実はそれが痛みの原因であるケースは少ないんです。実際、多くの患者さんが、私にそれを教えてくださつています。腰痛治療のために“手術”といわれた人は、その前に、ぜひAKA療法を受けてみてください。それでダメだつたら手術を……。まず、手術はしないですむはずです」

住田主任医師は、今日の整形外科医が、あまりにも短絡的に手術に走ることに対し、警鐘を鳴らしている。